

万葉の地学

不尽の高嶺

南 寿宏

♪あ一たまをくもの うえに出し

古今より歌われてきた富士の山。その最初期の歌が、次の山部赤人の名歌である。

田子の浦ゆ 打ち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける
たごのうらゆ うちいでてみれば ましろにそ ふじのたかねに ゆきはふりける

万葉集 巻三 318 山辺赤人

新古今和歌集にはこの歌が一部変更されて載っており、また、小倉百人一首に選ばれているのは、ご存じのとおり。

田子の浦に 打ち出でて見れば 白妙の 不尽の高嶺に 雪は降りつつ
たごのうらに うちいでてみれば しろたえの ふじのたかねに ゆきはふりつつ

新古今和歌集 巻六 675

山辺赤人

添削(?)したのは、藤原定家(諸説あり)。素朴ながら雄大な万葉風を嫌った定家が幽玄にして繊細な新古今風にしたものと思われるが、その評価ははなはだよろしくない。

以下、万葉318を元歌、新古今675を改作と表現する。

元歌	田子の浦ゆ 打ち出でて見れば	田子の浦を通して 出て見れば	田子の浦を通して見晴らしのいい河口に出ると富士山が見える。田子の浦からは富士山は見えない。
改作	田子の浦に 打ち出でて見れば	田子の浦に 出て見れば	

赤人は下級官僚として、実際に関東に旅しており、葛飾の真間の手児名の歌が有名。その行きがけに富士山を見た体験に基づく歌である。一方、藤原定家は上野国(群馬県)に流罪になったといい、群馬県高崎市に定家神社があるが、伝承の域を出ない。仮に事実であっても、群馬へは東山道(中山道)を通行するので、田子の浦は通らない。

田子の浦は海岸で、そこからは、10m以上の浜堤に阻まれて、富士山は見えない。河口に出て、初めて富士山が望まれ、現在その地には「田子の浦みなと公園」が置かれている。



田子の浦と『田子の浦みなと公園』(国土地理院HPによる)

浜堤とは、次のとおり。土佐湾沿岸にも、広く分布している。

浜堤（ヒンテイ） beach ridge
波によって打ち上げられた砂礫が、波の到達点上限付近に堆積し形成された直線状の微高地。礫浜で特に顕著。海岸線に平行あるいは斜交して複数の浜堤が列をなし、高まりとその間の低地とからなる浜堤平野をつくることも多い。個々の浜堤は海側に急傾斜し内陸に向かって緩く傾く。比高数m、幅数十m、長さは数kmに及ぶ。日本では縄文海進以降に4回の浜堤の形成時期があったとされている。
〔茂木昭夫 平井幸弘, 地学団体研究会編 新版地学事典〕

元歌	真白にそ	真っ白に	万葉集と新古今和歌集の（赤人と定家の）感性の違いによるもの。
改作	白妙の	真っ白な	

これは、好みの問題で、優劣はつかない。

元歌	雪は降りける	雪が降り積もっている	改作は「田子の浦あたりから富士山頂に雪が降るさまが見えるとは、なんと目のいいこと」と皮肉られている。
改作	雪は降りつつ	今まさに雪が降っている	

両歌の優劣については、個人の判断だが、元歌を高く評価する人が多いようである。

しかし、精神科医にしてアララギ派の歌人斎藤茂吉は、その著『万葉秀歌（上）』に次のように記している。

種々比較して味うのに便利である	万葉秀歌（上）岩波新書R2, p152 斎藤茂吉
-----------------	--------------------------

茂吉は万葉集を高く評価した人であるが、冷静である。

ちなみに、富士山に関する地学としては、次の高橋虫麿の歌がある。

…… 燃ゆる火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつつ …… …… もゆるひを ゆきもちけち ふるゆきを ひもちけちつつ ……	万葉集 卷三 319 高橋虫麿（長歌 部分）
--	------------------------

「燃える火を雪で消し、降る雪を火で消し」という表現から、8世紀当時の富士山が噴火していたことが分かる。

また、竹取物語では、かぐや姫が帝に貰った不老不死の薬を高い山の上で焼くと、その山から常に煙が上がるようになったとされ、それで山が『不死の山』と呼ばれるようになったと書かれている。